

帯解地域の後期古墳

—奈良市山町七ツ塚古墳群測量調査報告—

森下浩行

I はじめに

笠置山地（大和高原）から奈良盆地に向かって西へ派生した南北二つの丘陵とこれらに挟まれた谷部（旧帯解町の範囲）に古墳が分布しており、これを帯解古墳群と呼ぶ。この北側の丘陵の南裾を東西に延びる道路が奈良市市道南部 478 号線で、山町から菩提山町へ抜けている。この丘陵尾根南斜面には多くの古墳が存在し、道路の改良工事の事前調査として、1994(平成 6) 年 12 月に五ツ塚古墳群の、1997(平成 9) 年に七ツ塚古墳群の発掘調査を実施した。七ツ塚古墳群の発掘調査は、古墳群本体に係る部分はなく、墓道等を確認すべく実施し、第 4 号墳の前面で須恵器を伴う小土坑を検出している(大窪 1997)。

今回報告するのは、七ツ塚古墳群の発掘調査時に平板による墳丘及び地形測量(縮尺 1/100、等高線 20cm 間隔)を実施した成果である。測量期間は 1997 年 2 月 3 日～10 日、発掘調査を挟んで、2 月 25 日～3 月 27 日(計 28 日間)で、当時、埋蔵文化財調査センター職員であった森下浩行、大窪淳司と、大学生の山口均、坂倉清彦の 4 名で実施した。

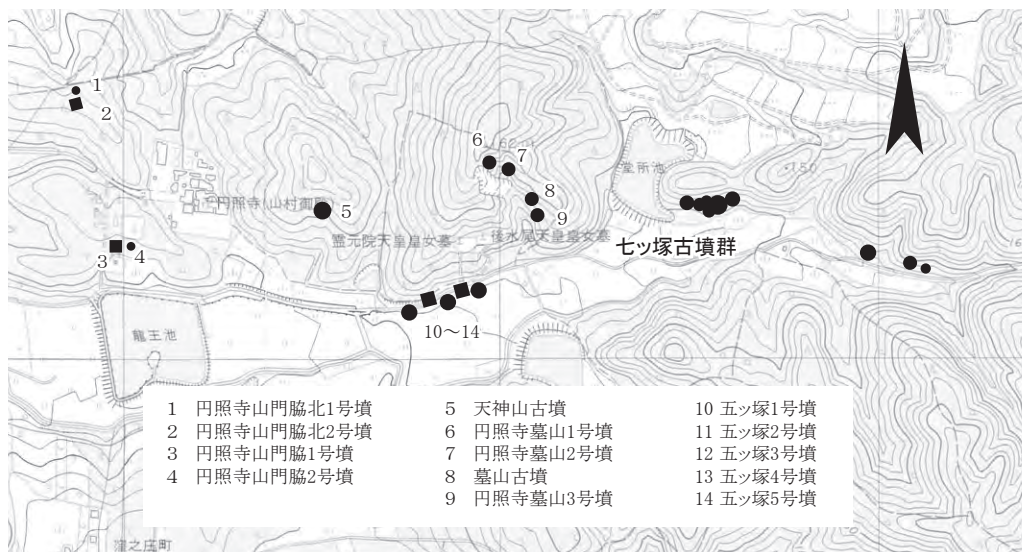
II 周辺の古墳

七ツ塚古墳群が位置する丘陵尾根南側の古墳について、西から順に概説する。

て、西から順に概説する。

円照寺山門脇北古墳群(第 1・2 号墳) 東から西に延びる丘陵が円照寺の存する箇所で二股に分かれ、その北側の丘陵頂部に位置する。円照寺山門よりかなり北西にある。『奈良市史』考古編には後期古墳研究会が測量した墳丘図が掲載されており、円照寺山門脇古墳(第 2・1 号墳)とする(小島 1968)。のちに同志社大学学生有志が墳丘測量。こちらは円照寺山門脇北古墳群(第 1・2 号墳)とする(深沢ほか 1998)。以下、山門脇北と称す。奈良県遺跡地図には名称が記載されていない(奈良県立橿原考古学研究所編 1998)。第 1 号墳は円墳で、直径約 9 m、高さ約 1 m。方墳の可能性もある。第 2 号墳は方墳で、一辺約 13 m、高さ約 1.5 m。資料は、墳丘測量図しかないが、丘陵頂平坦面にあり、立地からみて中期古墳の可能性はある。

円照寺山門脇古墳群(第 1・2 号墳) 東から西に延びる丘陵が円照寺の存する箇所で二股に分かれ、その南側の丘陵の南斜面に位置する。同志社大学学生有志が墳丘測量調査を実施し、円照寺山門脇古墳群とする(深沢ほか 1998)。また、奈良県遺跡地図でも円照寺山門脇第 1 号墳・2 号墳とする(奈良県立橿原考古学研究所編 1998)。以下、山門脇と称す。第 1 号墳は直径 15 m



七ツ塚古墳群及び周辺の古墳位置図(下図は国土地理院 1/10,000 地形図 帯解)

の円墳とされているが、方墳の可能性が高いとみる。東側は南北に通路があるため、不確定だが、西側をみると105.75～107.75 m等高線のくびれが墳裾を示すとすると、直線状になる。方墳とみた場合、北辺12 m、その他の辺は15 mで台形状を呈する。南辺からの高さは約2.5 m。北に開く盗掘坑と南に開く盗掘坑があるが、石室となる石材は見当たらない。2号墳は、直径約10 mの円墳で、南裾からの高さは約2 m。

天神山古墳 丘陵頂よりやや下がった南斜面に位置する。幅約2 mの組合せ式石棺が出土しており、現在一部が円照寺の庭石となっている（佐藤・末永1930）。同志社大学学生有志が測量した墳丘図がある。東西約20 m、南北約22 mの円墳で、高さは南裾より約5 m。石棺が出土したとみられる南北10 m、東西3～4 mの既掘坑は北から南へ開いているが、石室石材は見当たらない。石棺直葬の可能性もあるが、石棺を有する横穴式石室が存在したとすれば、指摘通り、墳丘の上半部に開口する終末期古墳の可能性もある（笠原ほか1988）¹⁾。

円照寺墓山古墳群（墓山第1・2・3号墳、墓山古墳）
第1・2号墳は丘陵頂部の南斜面に位置する円墳。第1号墳は直径15 m、第2号墳は直径8 mとするが、墳丘図が知られていないので、不詳。見かけはもう少し大きく見える。小古墳であるが、大量の武器・武具を副葬した中期古墳である。第3号墳・墓山古墳はともにさらにかなり下った斜面に位置する直径14 mの円墳で、

3号墳には横穴式石室が確認されている（佐藤・末永1930）（伊達宗泰1968）。周辺には小古墳が存在した可能性があり、群集墳を形成していたと思われる。

五ツ塚古墳群（西から第1・2・3・4・5号墳）丘陵尾根南斜面の裾部に位置する。文字通り五つの塚が並ぶように見えるが、直線に並ぶのではなく、W字状に並んでいる。円墳3基と方墳2基で、西から円墳、方墳、円墳、方墳、円墳と並び、円墳が南へ突出して並び、方墳がその谷部に並ぶ。墳形と立地から見て、おそらく円墳が方墳に先行するものとみられる。埋葬施設は、いずれも横穴式石室で、両端の2基は、天井がなく埋まっており、中央の3基は南に開口するが、現在は内部に立ち入れない。中央の3基の先後関係は、石室石材の大きさからみて、第3号墳、第4号墳、第2号墳の順に築造されたとみられる。おそらく最初に円墳3基（第1・3・5号墳）が造られ、ついでその間に方墳2基（第2・4号墳）が造られたとみて矛盾がない。（森下1995）。

続いて丘陵尾根南斜面の裾部に位置するのが七ツ塚古墳群で、さらに東へと小円墳が連なっている。

Ⅲ 七ツ塚古墳群

七ツ塚古墳群は、奈良市八島町堂所1271、1272に位置する。奈良県の遺跡地図（奈良県立橿原考古学研究所編1998）では、6基の円墳が載っており、西から第1号墳～第6号墳と付されている。文字通りの七つの塚ではない。立地するのは東西方向の丘陵の南裾で、東か

七ツ塚古墳及び周辺の古墳一覧表

古墳名		墳形	直径・一辺 (m)	埋葬施設	石室全長 (m)	立地	群構成
七ツ塚	1号墳	円墳	16	横穴式石室	推定 10	斜面南裾	群集墳
	2号墳	円墳	14	横穴式石室	推定9		
	3号墳	円墳	12	横穴式石室	推定8		
	4号墳	円墳	13.5	横穴式石室	推定8		
	5号墳	円墳	22.5	横穴式石室	推定 15		
	6号墳	円墳	16.5	横穴式石室	推定 10		
五ツ塚	1号墳	円墳	18	横穴式石室	10	斜面南裾	群集墳
	2号墳	方墳	15	横穴式石室	8		
	3号墳	円墳	18	横穴式石室	10		
	4号墳	方墳	14 × 16	横穴式石室	8		
	5号墳	円墳	18	横穴式石室	10		
円照寺墓山	1号墳	円墳	15	縦穴系		斜面頂部近く	2基 1組
	2号墳	円墳	8	縦穴系		斜面中腹	群集墳
	3号墳	円墳	14	横穴式石室			
	墓山古墳	円墳	14	不明		斜面中腹	単独
天神山		円墳	22	石棺		斜面中腹	2基 1組
円照寺山門脇	1号墳	方墳	15	不明		頂部	2基 1組
	2号墳	円墳	10	不明			
円照寺山門脇北	1号墳	円墳 (方墳?)	9	不明			
	2号墳	方墳	13	不明			

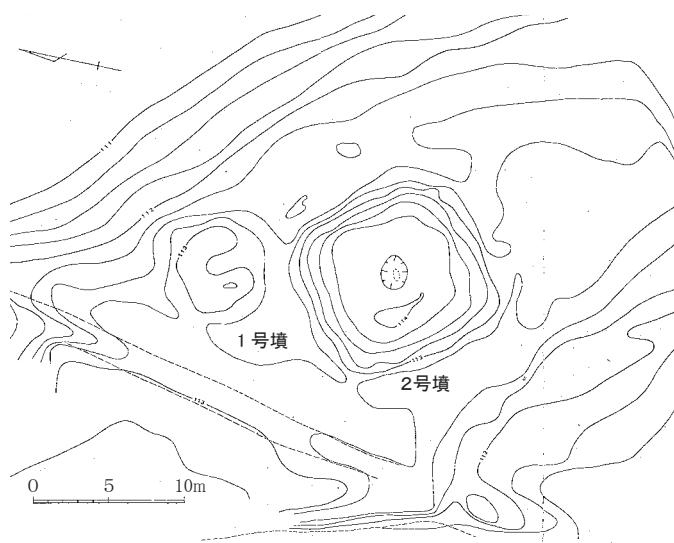
ら西へ下る谷地形に面している。各古墳の並びは、西から順に第1号墳、第2号墳で、中央の第3号墳と第4号墳は、北に第3号墳、南に第4号墳が位置する。さらに東へ第5号墳、第6号墳と続く。

いずれもいわゆる山寄の古墳で、背部に周溝がある。墳丘の残存状況は悪くないが、埋葬施設とみられる横穴式石室は、ほとんどが石室ごと持ち去られているようで、いずれも平面U字形の盗掘坑が残る。石材の痕跡がみられるのは6号墳のみである。坑の形状からみておおむね

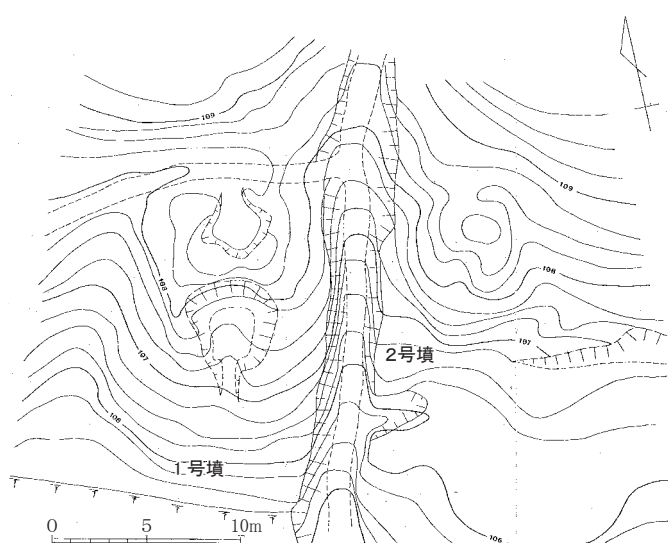
南あるいは南西方向に開口していたとみられる。

第1号墳 古墳群の西端に位置する。墳丘の南半部が削平されており、北半部と背部は残っている。北半部では一部、北東から南西方向に石材を抜いたとみられる盗掘坑が削平されずに残っている。埋葬施設は、盗掘坑から復元墳裾までをはかると全長11 mくらいの横穴式石室であったとみられる。開口方向は南西とみられる。

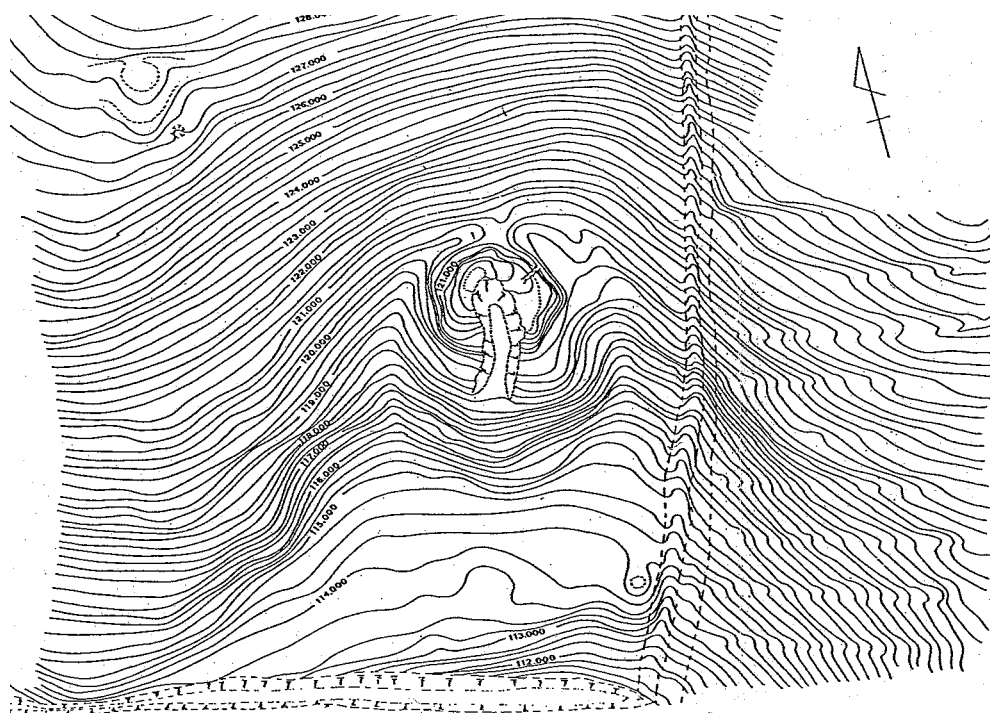
墳丘は、おおむね117.2 m等高線以上が残っており、墳丘東・西の118.6 m等高線までが背部に回らずそれ



円照寺山門脇北古墳群墳丘図 (1/500) 深澤他 1988 より転載



円照寺山門脇古墳群墳丘図 (1/400) 深澤他 1988 より転載



天神山古墳墳丘図 (1/600) 笠原ほか 1988 より転載

ぞれ東・西にくびれることから、背部の周溝の位置がわかる。117.2～118.6 m等高線のくびれ状況から墳丘規模を推定すると、直径 16 mの円墳が復元できる。現状の高さは背部では 0.4 m、開口部では 2 m以上。墳頂の標高は 119.116 m。

第2号墳 第1号墳の東に位置する。墳丘は残存するが、石室は盗掘により破壊。石材を抜いたとみられる盗掘坑は北東から南西方向に広がっており、長さ 5 m、幅は広いところで 3 m。埋葬施設は、盗掘坑から復元墳裾までをはかると全長 9 mくらいの横穴式石室であったとみられる。開口方向は南西。

墳丘はほぼ残存。117.2 m以上、118.2 m以下の等高線のくびれが墳丘の裾線を表しており、円弧状に周る。等高線のくびれ状況から墳丘規模を推定すると、直径 14 mの円墳が復元できる。現状の高さは背部では 1.2 m、開口部では 2 m以上。墳頂の標高は 119.085 m。

第3号墳 第2号墳に接して北東に位置する。墳丘は残存するが、いびつである。石室は盗掘による破壊。石材を抜いたとみられる盗掘坑は北から南方向で、長さ 5.2 m、幅 2.4 m。埋葬施設は、盗掘坑から復元墳裾までをはかると全長 8 mくらいの横穴式石室であったとみられる。開口方向はほぼ南である。

墳丘はいびつで、西側が 118.6 m以上、東側が 119.0 m以上が円弧状に周り、いずれも 119.6 m以下の等高線のくびれが裾線を表す。いびつな要因は、西側は2号墳北東背部の、東側は後述する第5号墳北西背部の周溝が重複していることによる。このことにより第3号墳が第2号墳よりも、また第5号墳よりも先に築造されたことがわかる。当初の状態が良く残っている墳丘背部の等高線からみて、第3号墳は直径 12 mの円墳が復元できる。現状の高さは背部では 0.4 m、開口部では 2 m以上。墳頂の標高は 120.103 m。

第4号墳 2号墳の南東、3号墳の南に位置する。墳丘は残存するが、南縁が水路と通路によって破壊されている。石室は盗掘による破壊。石材を抜いたとみられる盗掘坑は北東から南西方向に広がっており、長さ 6.4 m、幅 4 m。坑の位置は復元した円墳の中央よりやや東寄りにある。埋葬施設は、盗掘坑から復元墳裾までをはかると全長 8 mくらいの横穴式石室であったとみられる。開口方向は南西。

墳丘は西側の 117.4 mから 118.2 m等高線が盗掘坑長軸に平行して南西から北東方向にほぼ直線状に伸びている。東側と背部では、118.0 mから 118.4 mまでの等高線がくびれ、裾線を表す。墳丘の北西側の等高線の

状況をみれば、後世に円墳の西側が改変を受けて直線状になったとみるべきである。第3号墳と第4号墳の先後関係は不明であるが、3号墳が後出とした場合、古墳築造の通路として使われた際の改変の可能性がある、第4号墳が後出する場合でも第3号墳の盗掘の際の改変の可能性がある。いずれにせよ、当初は直径 13.5 mの円墳が復元できる。現状の高さは背部では 1 m、開口部では 2 m以上。墳頂の標高は 119.899 m。

第5号墳 第3号墳・第4号墳に接して、第3号墳の東、第4号墳の北東に位置する。墳丘は残存するが、第4号墳と同様、南縁が水路と通路によって破壊されており、また、南西側がいびつである。石室は盗掘による破壊。石材を抜いたとみられる盗掘坑は長さ 12.5 m、幅は広いところで 6 m。坑の位置は復元した円墳の中央よりやや東寄りにある。坑の奥は、傾斜が緩やかであり、奥壁の一部が残存している可能性がある。埋葬施設は、盗掘坑から復元墳裾までをはかると全長 15 mくらいの横穴式石室であったとみられる。開口方向は南南西。

墳丘は、南・南西側以外は等高線がきれいな円弧を描き、118.4～119.6 mまでの等高線のくびれが裾線を表している。南西側のいびつな形状は、第4号墳の背部の周溝が墳丘南西側にあたり、重複関係がみられるためである。このことにより第5号墳が第4号墳よりも先に築造されたことがわかる。墳丘の裾線から直径 22.5 mの円墳が復元できる。現状の高さは背部では 1.3 m、開口部では約 3 m。墳頂の標高は 121.344 m。

第6号墳 第5号墳の東に位置する、古墳群中、最東端の古墳。墳丘は残存するが、南東縁が水路と通路によって破壊されている。石室は盗掘により破壊され、残存する石材が数点見られる。石材を抜いたとみられる盗掘坑は北東から南西方向に広がるものと、北西から南東方向に広がるものがある。最初に石材を抜いた方向は北東から南西方向であろうから、北西から南東方向の坑は盗掘後に残存していた側壁石材を抜き出したものかもしれない。北東から南西方向の坑は、東西 3.8 mだが、南北は北西から南東方向の坑に破壊され不明確で、およそ 8.5 mとみられる。北西から南東方向の坑は長さ 8.5 m、幅 3.5 m。最初に石材を抜いたとみられる坑の位置は復元した円墳の中央よりやや東寄りにある。埋葬施設は、盗掘坑から復元墳裾までをはかると全長 10 m程度の横穴式石室であったとみられる。開口方向は南西。

墳丘は、西側が 121.0 m以上、東側が 121.6 m以上、いずれも 123.0 m以下の等高線のくびれが裾線を表す。東側で 121.4 m以下の裾線がはっきりしないのは、道



七ツ塚古墳群墳丘及び地形図 (1/400)



七ツ塚古墳群墳丘及び地形図西半 (1/200)



七ツ塚古墳群墳丘及び地形図東半 (1/200)

によって削られているためである。また、西側で 120.8 m 以下の裾線がはっきりしないのは、墳裾は接していないものの、後続する 5 号墳の周溝で改変されたものと思われる。墳丘の裾線から直径 16.5 m の円墳が復元できる。現状の高さは背部から 0.2 m、開口部では約 3.2 m。墳頂の標高は 123.143 m で背部は当初より埋まっているものと思われる。なお、背部が不明瞭だからであろうか、この古墳は一見二つの古墳に見える。そのため、名称が「七ッ塚」となった可能性がある。

七ッ塚古墳群についてまとめると、6 基の円墳のうち、最も大きい第 5 号墳が直径 22.5 m、ついで第 1 号墳と第 6 号墳がそれぞれ直径 16 m と 16.5 m、第 2 号墳と第 4 号墳がそれぞれ直径 14 m と 13.5 m、最も小さい第 3 号墳が直径 12 m で、等質的ではなく、墳丘規模は 3 段階に分かれる。また、東西 80 m、南北 30 m の範囲に密集しており、重複関係も見られる。重複関係からは、第 3 号墳→第 2 号墳、第 3 号墳→第 5 号墳、第 5 号墳→第 4 号墳という先後関係となる。古墳群の造営については、資料が少なく、憶測の域を出ないが、五ッ塚古墳群の造営を参考にとすると、同様に最初に古墳群の両端と中央の 3 基の古墳（第 1・3・6 号墳）が造られ、その間を埋めるように 2 基の古墳（第 2・5 号墳）が造られ、最後に 4 号墳が造られたと考えると矛盾がない。

IV 帯解古墳群北丘陵の尾根南側の古墳について

ついで、帯解古墳群北丘陵尾根南側の古墳（「I 周辺の古墳」参照）のなかでの七ッ塚古墳群の位置付けを行いたい。まず、立地については、丘陵尾根頂部（山門脇北 1・2 号墳）と丘陵尾根南斜面とに分かれ、斜面は、頂部近く（墓山第 1・2 号墳）、中腹（山門脇第 1・2 号墳、天神山古墳、墓山第 3 墳）、裾部（五ッ塚古墳群、七ッ塚古墳群）とに分かれる。

ついで、群構成は、単独墳（天神山古墳）、2 基 1 組（山門脇北第 1・2 号墳、山門脇第 1・2 号墳、墓山第 1・2 号墳、墓山 3 号墳・墓山古墳）、3 基以上（五ッ塚古墳群、七ッ塚古墳群）に分かれる。

埋葬施設が横穴式石室またはその可能性が高い古墳は、五ッ塚古墳群、七ッ塚古墳群、墓山古墳、墓山第 3 号墳であり、いずれも後・終末期古墳である。また、堅穴系の埋葬施設であるのは、墓山第 1・2 号墳であり、中期古墳である。

これらのことからみて、より高い位置に立地しているものが相対的に古く位置づけられ、2 基 1 組のものも古く位置づけられる可能性がある。丘陵尾根頂部に立地する山門脇北第 1・2 号墳は中期古墳の可能性が高く、

裾部に位置する五ッ塚古墳群、七ッ塚古墳群はより新しい後・終末期の群集墳である。

では、五ッ塚古墳群と七ッ塚古墳群はどのように位置づけられるのか。構成する古墳数は 5 基と 6 基でほぼ同数であるが、五ッ塚古墳群は一定の間隔をあけて造られているのに対して、七ッ塚古墳群では密集し、墳丘が重複しているものもある。また、墳丘の大きさも五ッ塚古墳群は等質的であるのに対し、七ッ塚古墳群ではばらつきがある。五ッ塚古墳群は 2 基が方墳、3 基が円墳であるのに対して、七ッ塚古墳群はすべて円墳で構成されているが、先に論じたようにいずれも最初に古墳群の両端と中央の 3 基が造られ、その間を埋めるように 2 基または 3 基の古墳が造られたものとする。五ッ塚古墳群と七ッ塚古墳群とは、同様の立地でありながら、それぞれ集団内の関係は異なっていたようで、五ッ塚集団が等質的とみられるのに対して、七ッ塚集団には格差があったものとみられる。

註

1) ここでは仮に「円照寺裏山古墳」としているが、後に佐藤・末永の報告（1930）による「天神山古墳」と訂正されている。（日高 1989）

参考文献

- 大窪淳司 1997 「七ッ塚古墳群の調査 第 1 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要 報告書 平成 8 年度』奈良市教育委員会
- 日高慎 1989 「円照寺庭石について」『古墳ジャーナル』第 4 号 同志社大学考古学実習室古墳文化研究会
- 笠原勝彦・田村悟・日高慎ほか 1988 「円照寺裏山古墳」『古墳ジャーナル』第 2 号 同志社大学考古学実習室古墳文化研究会
- 小島俊次 1968 「山村地区」『奈良市史』考古編、奈良市
- 佐藤小吉・末永雅雄 1930 「圓照寺墓山第 1 號古墳調査」『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第 11 冊、奈良縣
- 伊達宗泰 1968 「円照寺墓山 2 号墳」『奈良市史』考古編、奈良市奈良県立橿原考古学研究所編 1998 『奈良県遺跡地図 第 1 分冊』奈良県教育委員会
- 深沢敦仁・田村悟・藤川智之 1998 「新入生歓迎測量調査報告」『古墳ジャーナル』第 3 号 同志社大学考古学実習室古墳文化研究会
- 森下浩行 1995 「五ッ塚古墳群の調査 第 1 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要 報告書 平成 6 年度』奈良市教育委員会